

## 巻頭のことば

— 『同志社大学英語英文学研究』 100号発刊に寄せて —

齋 藤 勇

『同志社大学英語英文学研究』が100号を迎えたという。100という回数は人間の営みにおいて目指すひとつの到達点であり、同時にそこから再出発する起点でもあると認識すれば感慨にふける。

元々『人文学』という標題で、戦後しばらくして(1948年)、文学部三学科(英文学科、文化学科、社会学科)共通の研究発表誌として、奥付には同志社大学人文学会編となっていたものを先祖としている。私などはまだ英文学科に入学していない大学予科生の頃である。大学院の修士課程在籍の頃、第三号が発行されている。この号に(1950年)、矢野禾積(かずみ)教授が『『文学会』と西洋文学』という130頁以上に及ぶ長編論文を寄稿しておられる。矢野先生には教室で、ウォルター・ペイターの「ロマンティシズム」と「スタイル論」を講読していただいて非常に感銘を受けていたので、若き英学徒である私は夢中になって読んだ記憶が懐かしい。(これは紙型を残しておいて、後に一本にまとめられて出版されている。)その後これに文学部各学科がそれぞれの学科を名のっていれかわり特集号を発行していた。(私事にわたって恐縮であるが、私の博士論文も『人文学』77号〔1964年〕、81号〔1965年〕の英文学特集に掲載させて頂いて、その後出版された。)それが文学部改編の際、英文学科は『同志社大学英語英文学研究』という少々長い誌名を名乗り、単独号数で編集を続け、それが今回で100号に辿りついた、ということであろう。

こういう訳で『人文学』(英文学特集)の時代が懐かしい。心の故郷でも

あろうか。因みにこの学会誌は上野直蔵教授（後年、学長、総長）の肝煎りが著しい。ことのついでに、チョーサー学者としても著名な上野教授のことに触れておこう。苦学の人で、遅く学問に志された。現在我々が何気なく親しんでいる英文学科の行事や出版物の基礎は大方この先生の肝煎りによるものである。太平洋戦争中、文学部の一専攻におとされていた英文学科を復活して現在の規模にされたのはこの先生ひとりの努力によるものだ、といっても過言ではないだろう。また同志社の英文学科関係で現在それと知られた学者や研究者は（故人も含めて）殆ど上野先生の丹精によるものである。名伯楽でもあった。いささか脱線して、懐古停迷した向きがあるかもしれないが、この際と思って上野先生のことには触れてみた。意のあるところを汲んで諒とされたい。

今の英文学科のスタッフは、院生も含めて実質的に研究業績発表の場にすこぶる恵まれているように思う。というのはこの『同志社大学英語英文学研究』の他に、*Doshisha Literature*、『主流』、大学院生にはCore、と研究に精進さえしておればその成果発表の場に事欠かない。また英文学科の書庫の充実も目を見はるものがある。他学から同志社大学大学院英文学専攻に進学されたある人がこう漏らしていたことを思い出す。「私の専門分野で、あの文献、この文献、どれも読みたいと思っていて、どこの大学でもアクセスできなかったものが、同志社に全部ある！嬉しくなって全部借り出しました。」と述懐しておられたことを思い出す。願わくはこの豊穡な蔵書を誇る知的財産を活用して『同志社大学英語英文学研究』を今後ともさらに一流の学会誌に育てたいものだと思惟する。

往生、数えて卒寿を迎え、いささか低回、懐古趣味に陥ち入って散漫な記述になったと自省している。諒とされたい。101号以下の充実を期待して、擱筆する。